

話し相手ボランティアの活動支援としての 「定例会」の機能と役割

－「活動への勇気」の後押しという視点－

横山貴美子

要 約

話し相手ボランティアの行動原理、組織原理、社会原理の解明というテーマに沿って、本稿では、話し相手ボランティア活動の支援の一環としての「定例会」のあり方を具体的にすることを目的としている。

埼玉県T市において、2005年3月より月1回の割合で開催されている定例会の3月から7月までの5回分の逐語録を、参加者と進行役別にKJ法によって分析し、その内実を把握したうえで、ハンナ・アレントの「活動理論」に依拠しつつ、「定例会」のあり方を考察した。最終的には、活動支援としての「定例会」に求められる機能と役割を明らかにしたものである。

具体的には、「定例会」が活動支援として機能するためには、活動者の「活動への勇気」を後押しするように機能しなければならないこと、「定例会」は参加者の全ての自由な語りに関われ、①活動者と対象者の未完の「対話」を一巡、補完、完結させる場として機能すること、②活動者が、自身の（家族）物語を再構成する場として機能すること、③対話や関係作りの技術、方法など必要とする知識を得て学ぶ場として機能することが求められていることを明らかにした。また、「定例会」の進行役は、モデレーター（調整役）やプロモーター（促進者）としてあるべきことを提起した。

キーワード：話し相手ボランティア、活動支援、定例会、調整役、促進者

はじめに

わが国における「話し相手ボランティア」は、1980年代頃から、主に在宅高齢者を対象とする社会福祉サービスの担い手として、社会福祉協議会等が活動主体をボランティアに求め、中高年齢の主婦層がそれに応えるという形で始まったボランティア活動である。

1996年に全国社会福祉協議会が実施した「全国ボランティア活動者実態調査」の報告書¹⁾によると、「相談・話し相手等」ボランティアの全ボランティアに占める割合は17.4%であり、2002年には「話し相手」ボランティアとして、その割合が37.2%になっていることが報告されている²⁾。6年の経過の中で、活動内容が「相談・話し相手等」という幅を持たせた表現から「話し相手」と

いう表現に変わったこと、その活動者の割合が約2倍になっているという結果から、「話し相手ボランティア」活動の広がりを確認することができる。

このように、実態としては四半世紀以上の実績をもつ活動であるにもかかわらず、今日に至って注目されるようになったその背景として、新聞やテレビ等のメディアが「傾聴ボランティア」としてその活動を紹介するようになったこと、看護・介護現場でケアに携わる専門職や哲学³⁾・社会学・社会福祉学等の研究者が、それぞれの立場で「対話、聴くこと」に着目し、それを力として捉えるようになったことなどが考えられる。

現在、話し相手ボランティアは、その活動者の裾野を広げつつある。それに伴って、研究も進められ、このボランティアの力を伸ばすためには、

(所 属)

1) 山梨県立大学 人間福祉学部 福祉コミュニティ学科

「よき聴き手」となるための系統的な教育と訓練の場を含めた、専門家や他の地域リソースによる総合的な活動支援およびネットワークの構築が求められているとの提起がなされている⁴⁾。

本稿は、「定例会」が話し相手ボランティア活動の支援の一環として、一定の影響を及ぼしているとする実証的研究結果に基づき⁵⁾、そのあり方を具体的にすることを目的としている。

そのために、まず、筆者が当初より参与する埼玉県T市における地域包括支援センターの話し相手ボランティア事業の概要と現在までの活動状況をまとめる。

そして、その事業の一環として、2005年3月より月1回の割合で開催されている定例会の3月から7月までの5回分の逐語録を、参加者と進行役別にKJ法によって分析し、その内実を把握したうえで、ハンナ・アレントの「活動理論」⁶⁾に依拠しつつ、「定例会」のあり方を考察する。最終的には、活動支援としての「定例会」に求められる機能と役割を具体的に示すものである。

1. 研究の経緯と課題

村田は、本活動を「傾聴ボランティア」と称し、その「聴くこと」に専念する活動を通して、傾聴は「関係存在である人間」の存在を支える大きな力となり、「重い病気や障害で苦しむ人、特に死に臨み、その存在そのものを失う不安に苦しむ終末期の患者さんや家族にわれわれのできる最後の最大の援助」であると位置づけた⁷⁾。そして、活動の場を、主にターミナルケアの場としながら、よき聴き手となるためには、しっかりとした基盤の上にたった系統的な教育と訓練が必要であることを提起し、具体的には、①何を聴くのか、②どのように聴くのか、③なぜ聴くのかの理解と、傾聴するときに常にこれらのことを意識した実践であるべきとしている。

また、小澤は時系列データに基づく事例的検討という手法によって、基礎的研究としてシニア傾聴活動の実態調査を行い、傾聴活動は利用者およびボランティアの日々の気分の改善に一定の影響を与えていること、また、ボランティアにとって、

特に、活動をすぐに開始するための情報提供、専門家のスーパーバイズ、現場スタッフのカンファレンスなどが不足していることを明らかにしている⁸⁾。そして、地域で芽生え始めた各ボランティアグループの力を伸ばすためには、専門家や他の地域リソースを含めた総合的な活動支援システムおよびネットワークの構築が必要であると提起している。

筆者は、話し相手ボランティアグループKを対象にケース・スタディを実施し、ボランティアが対象者の話を聴くことから始めて聴くことを継続することは、孤独を主体的に選択しているわけではない対象者に、他者との関係のなかでその都度与えられ、確認されるアイデンティティの確認の場を提供していることになり、ボランティア自身も生きがいを得ているということ、また、いわゆる「定例会」が活動の継続性において一定の影響を及ぼしているとの結論を得た⁹⁾。

また、筆者は先般、話し相手ボランティア養成講座を活動支援の一環と位置づけ、ハンナ・アレントの「活動」理論に基づき、その掘るべき視座を考察し、話し相手ボランティアが「よき聴き手」としてあるための活動支援として、「養成講座」のプログラム内容は、「多数性」という人間の基本的条件を喚起し、「対話」の在りようを具体的にイメージできるものでなければならないこと、そして、聴くことの実践において「変化することを恐れない、しかも自ら変えるのではなく、変わることを待ち構える」姿勢を支える視座を具体化した内容も講座のプログラム内容として求められることを結論とした。具体的には、「路上のふたり」と「人間彫刻」というふたつの演習をプログラム内容として提起した¹⁰⁾。

2. 話し相手ボランティア事業と「定例会」の概要

2.1 話し相手ボランティア事業の概要¹¹⁾

～埼玉県T市地域包括支援センターの取り組み～

1. 事業実施主体

地域型在宅介護支援センター

(2004年度～2005年度)

地域包括支援センター (2006年度～)

2. 目的

- 1) 主に、地域の介護者および高齢者の自宅、高齢者施設へボランティアが出向き、話し相手となることにより生活の質向上の助けとなる
- 2) 対象者を定期的に訪問することによって、対象者の状況変化を見守り、必要に応じた早期対応を目指す
- 3) 地域住民個々の持てる力をボランティアとして活用することによって、地域住民の相互扶助を推進する

3. 事業システム

- 1) 1年度で話し相手ボランティア養成講座(全6回)、在宅訪問向け研修(1回)を実施する
 - ①養成講座参加者は公募とする(ただし、センターの担当地域の住民を優先)
 - ②養成講座の受講料は無料とする
 - ③養成講座は筆者考案のプログラムに基づき、筆者およびセンター職員によって実施する
 - ④在宅高齢者訪問のための研修(2.5時間)を養成講座後実施する
- 2) 話し相手ボランティアは個人ボランティアとして活動する
- 3) センターは、講座修了のボランティアに対して、在宅高齢者や家族の要望に応じて訪問先をコーディネートする
 - ①民生委員や地域福祉活動者、介護保険事業者等を通じてボランティア訪問の実施を案内する
 - ②ボランティア訪問希望者はセンターが窓口となり、申し込みを受け付ける
 - ③センター紹介による活動以外にも施設等で自由に活動できることとする
- 4) センターは話し相手ボランティアの後方支援を行う
 - ①月1回話し相手ボランティア定例会を実施

する

- ・話し相手ボランティア継続の支援のために実施する
- ・定例会への参加は任意とする
- ・各自が必要に応じて、ボランティア活動を行う中での迷いや不安を話し合う場として活用し、筆者を含む大学教員等から助言を受ける
- ②定例会のほかに、必要に応じて勉強会を行う
 - ・ボランティアのスキルやモチベーションの維持向上を目的として実施する
- ③訪問時の状態変化等の報告を受け、必要に応じて対応し、活動上の緊急相談を受け付ける

5) 費用負担

- ①高齢者や介護者等は、無料でボランティア訪問を受け付ける
- ②ボランティア活動者は、自費でボランティア保険への加入を義務付ける。訪問の際に派生する交通費は自費とする

4. 事業の現状

- 1) 養成講座実施状況(表1)
- 2) 定例会および勉強会実施状況
 - 2005年3月以降、定期的に月1回実施
- 3) 活動状況
 - ①センター紹介の在宅高齢者訪問件数は22件(2006年4月現在)
 - ②複数の個人やグループが、自主的に介護老人保健施設または福祉施設を訪問

2. 2 「定例会」の概要

定例会は、「話し相手ボランティア活動の支援の一環として有用である」とする先行研究結果に基づき、第2回養成講座を終了した2005年3月を第1回として、現在まで継続的に月1回(毎回2時間程度)の割合で開催されている。しかし、

表1 養成講座実施状況

回	開催時期	受講者数	備考
第1回	2004年12月～1月	58名	曜日を変えて半数ずつ実施
第2回	2005年2月～3月	30名	
第3回	2006年7月～8月	30名	

具体的な「定例会モデル」の存在しない現状にあって、筆者を含むスタッフは、①参加者は、基本的に養成講座を修了した者とするが、活動に興味関心のある人には広く開かれた会とする、②「場」を設けて活動者の参加を待ち、その参加は任意とする、③定例会は、任意参加者の「自由な語り」に開かれる、という3項目の基本スタンスを確認したうえで始めることとした。

定例会の構成員は、任意参加を前提に、養成講座修了生や活動に興味関心のある非修了生、ならびに研究者等で、毎回20名～30名の参加者が現在に至っている。2005年11月の定例会参加者25名に実施した無記名、自記式アンケート調査¹²⁾によると、毎月参加している者13名、2～3回欠席した者8名、2ヶ月に一回程度参加している者2人、その他2名となっている。アンケートを実施した11月までに9回定例会を開催しているが、20名弱が定期参加、10名程度が不定期参加となっており、この時点での養成講座修了者88名のうち3割程度が定例会に参加している現状を確認することができた。

また、会場は当面、開催日程にあわせて事業実施主体である地域包括支援センターが確保し、参加者に周知することとした。運営にあたるセンタースタッフは、会場確保を含めた当日までの準備・調整を行い、筆者は定例会の進行役として関わることとなった。その他、2～3名の大学院生が受付や記録係として交代で役割を担ってくれている。

定例会当日は、受付において出席簿に記名、資料を受け取り、円形に配置された椅子に任意に着席する。定刻になれば、進行役である筆者の呼びかけで参加者の活動に寄せる自由な語りが始まる。そして、その話題に呼応した語りが続く、基本的に、まとめや結論を導くことなく定時に終了する。解散後は、時間の許す限り、参加者同士やスタッフとの情報交換を行い、任意に解散する流れである。

3. 調査の概要

3.1 調査の目的、方法および倫理的配慮

「定例会」が活動支援として、どのように機能しなければならないのかを明確にするために、参

加者の語りと進行役の発語別に逐語録を分析し、その内実を知る。

具体的には、2005年3月～7月までの5回分の逐語録を、参加者、進行役別にKJ法によって分析する。なお、参加者には、調査結果はすべて個人が特定できない内容として公表されることを口頭で説明し、了承を得たうえで録音を行い逐語録の分析を行った。

3.2 調査結果

3.2.1 参加者の「語り」の分析結果 (図1)

3.2.2 進行役の「発語」の分析結果

1. 要約 (要点を整理して返す) …… 24項目
2. 開いた質問 …… 21項目
3. 意見 …… 16項目
4. 閉じた質問 …… 15項目
5. その他 (挨拶など) …… 8項目

3.3 考察

～「活動への勇気」の後押しという視点から～

3.3.1 参加者の「語り」の分析結果に関して

前述したように筆者は、話し相手ボランティア養成講座も活動支援の一環と位置づけ、ハンナ・アレントの「活動」理論に基づき、その抛るべき視座を考察し、話し相手ボランティアが「良き聴き手」としてあるために、支援の一環である「養成講座」のプログラム内容は、「多数性」という人間の基本的条件を喚起し、「対話」の在りようをイメージできるものでなければならないと考え、その具体的内容を提言してきた。

「定例会」は、その養成講座を修了した活動者が、活動を通して何を感じ、思い、考えているのかを表出する場である。そのような一連の流れの中で、本考察は必然的にアレントの活動理論に依拠することとなる。

今回の主たる調査内容である参加者の「語り」の分析結果における注目点は、①各項目群に「不安」項目が含まれていること、②対象者と活動者双方の「家族」に関することが多く語られていること、③対象者との「関係性」に言及した項目が多く、特に「対話のあり方」に関して多く語られている

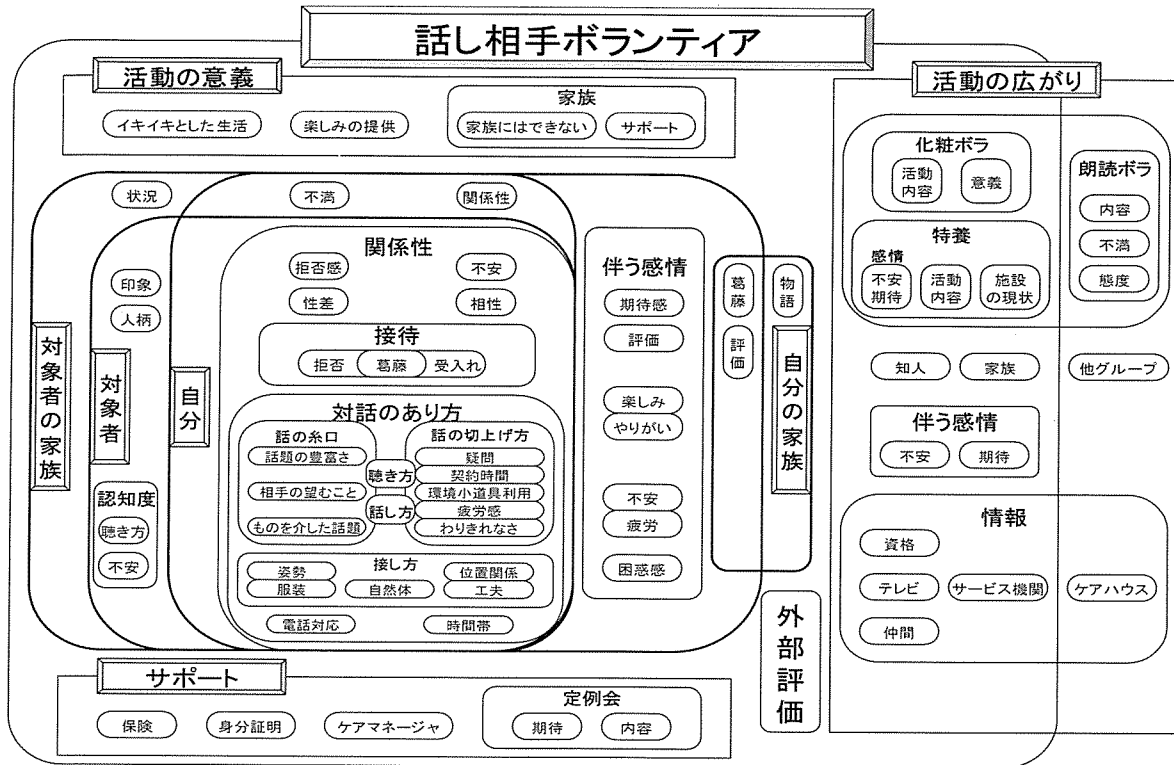


図1 参加者の「語り」の分析結果

という3点を挙げるができる。

なぜ、各項目群に「不安」項目が含まれているのであろうか。アレントは、「活動する」とは人間の「多数性」という基本的条件のもと、「創始する」「始める」という意味と同時に、「何かを動かす」という意味でもあると述べている¹³⁾。本活動は、ボランティアが対象者の私的空間に出向き、ひとことを発することから始まる。そして、対象者と活動者の言葉を介した相互行為によって双方が「現われ」、それがそれぞれのリアリティを形成するというプロセスを経る。そして、アレントは「自分の私的な隠れ場所を去って、自分が誰であるかを示し、自分自身を暴露し、身を曝す。その本来の意味の勇気」がなければ活動と言動は不可能であるともいっている¹⁴⁾。

このアレントの「活動」理論に依拠すれば、「自分の私的な隠れ場所を去って、自分が誰であるかを示し、自分自身を暴露し、身を曝す」話し相手ボランティア活動は、非常な勇気を必要とする活動であり、活動の継続とは、「活動への勇気の継続」であると言い換えることができると筆者は考える。

改めて、なぜ、各項目群に「不安」項目が含まれているのであろうか。それは、活動者は対象者を前にして、自分が誰であることを示し、自分自身を暴露し、身を曝さなければならず、そのプロセスは不可予言性・不可逆性を特徴としているからではないだろうか。それゆえに、「活動への勇気の継続」は、「これでいいのだろうか」というようなその時々問いとともに、「不安」感情を常に伴い、活動への勇気の一步と表裏一体のものとして立ち現れるのではないだろうか。このように、話し相手ボランティアが、その活動の特性として、「不安」感情を常に伴うとするなら、定例会は、「不安」感情とともにあるその勇気を後押しするものでなければならず、そのように機能しなければならないことになる。

また、参加者は語りの中で、対象者の家族についての語りとともに、活動者自身の家族についても多く言及しているという結果を得た。これは、対象者と家族の関係性と自身の家族関係がオーバーラップするからではないかと考えられる。つまり、活動者は定例会で、必要に応じて自身の家族物語を再構成しているのではないだろうか。それを経

ることなく、対象者と家族の関係性を納めることが出来ないのではないだろうか。

そして、「対話のあり方」について多くの言及があったことについて考えてみたい。本来、「聴くこと」と「語ること」は対でしか成立せず、その対を対話とするなら、対話はその時その場で完結しなければならない。しかし本活動は、たとえば、家族もなく独居で生活を送っているなど対話の不成立やアンバランスを生む居住環境のなかで生活を送る人を対象者として位置づけている。つまり、必然的に「聴くこと」と「語ること」の偏在が顕著で、それゆえに活動は成立するというその特殊性は、本来の対話が成立するまでは活動者に未完結の「何か」を残留させることになる。その「何か」とは、調査結果の各項目群に含まれている「伴う感情」項目ではないだろうか。活動者は、対象者の思いや気持ちを聴くという行為を続けることによって、聴くことに伴う感情を残留させやすいということができよう。

「対話」は感情を伴い、その感情を納めない限り完結しないのであれば、定例会は、残留した感情を納める場として機能しており、そのように機能することによって始めて対話は完結する。本活動は、対象者と活動者間の「未完結の対話」を完結させる場を必要としており、「対話」を一巡させる場が必要な活動であるともいうことができよう。定例会は、「未完結の対話」の完結を促す場としての機能も付与されなければならないことになる。

3. 3. 2 進行役の「発語」の分析結果に関して

筆者は、このような定例会に「進行役」として当初より関わってきた。しかし、進行役の必要性や資質等についての議論も含めて、その役割や意義を明確にしたモデルが構築されていない現状にあって、筆者は当面、定例会の任意参加者の「自由な語り」を妨げることのないようにというスタンスで臨むことにした。

「進行役」の発語の分析結果によると、定例会5回分での発語のトータルは90語弱であり、1回の平均発語数は20語弱である。1回の定例会

の所要時間は120分であることから、5～6分に1回のペースで言葉を投げかけていることになる。これらの発語は、要約(24項目)、開いた質問(21項目)、意見(16項目)、閉じた質問(15項目)、その他(8項目)として整理することができた。

このことにより、筆者は、個々の自由な語りを「要約」して、発言者や他の参加者に戻すことをしており、「開いた質問」や「閉じた質問」によって、参加者ひとりひとりが、思いや考えを自由に語り、それが「新たな語り」に開かれるように働きかけ、質問や疑問に関して、私見として「意見」を述べている現状を確認することができた。

「自由な語り」は、言葉を介した相互行為である。それは、予期せぬ感情のもつれや、態度のかたくなさ、言葉の使い方の食い違いなどを顕在化させることがある。「進行役」は必要に応じて、これらを解きほぐすモデレーター(調整役)としての機能を発揮しなければならない。

また、定例会は、ひとつの「自由な語り」から始まり、それに呼応、触発された語りが続く。そのプロセスは、無制限性・不可予言性・不可逆性という特性を併せ持つことになる。そこで、参加者ひとりひとりが、思いや考えを自由に語り、それが「新たな語り」に開かれるよう促すプロモーター(促進者)としての機能も発揮しなければならない。

つまり、参加者の「自由な語り」に開かれる定例会の進行役は、プロモーター(促進者)として、また、モデレーター(調整役)として機能して、その役割を果たさなければならないということができよう。

4. 結 論

本調査研究により、話し相手ボランティアは「活動への勇気」を得る場を必要としてことがわかった。そしてその場において、未完で終わることが多い対象者との対話を一巡させ対話を完結させるように語り、自身の家族物語を再構成しようとしている。また、対象者との対話を成立させ、関係を構築する具体的な方法や技術を学ぶ場を求

めていることが明確になった。

このような活動者の志向に沿って、「定例会」が活動支援として機能するためには、活動者の「活動への勇気」を後押しするように機能しなければならない。具体的には、「定例会」は参加者の全ての自由な語りに関われ、①活動者と対象者の未完の「対話」を一巡する場として機能すること、②活動者が、自身の（家族）物語を再構成する場として機能すること、③対話や関係作りの技術、方法など必要とする知識を得て学ぶ場として機能することが求められている。

また、「定例会」の進行役は、参加者ひとりひとりが、それぞれの自由な語りに好奇心をもって聴く「聴衆」であるようにモデレーター（調整役）として機能し、参加者ひとりひとりが、自由に「現われ」を開示し、それが「新たな語り」に関われるようにプロモーター（促進者）として機能しなければならない。

話し相手ボランティアとは、自身の「私的空間」から勇気をもって一步を踏みだし、『注意』をもって聴く耳』となって、対象者が直面する存在の危機的状況を支えるボランティアである。その「活動」と「言動」への勇気は、後押しされることによって持続への可能性に関われる。「定例会」は、場を設けて待つスタッフがモデレーターやプロモーターとして機能することによって、活動支援の一環となりえる。

5. まとめ

ボランティア活動は、自発性、公共性、連帯性、無償性を性格として、先駆的、開拓的役割を担っているといわれるが、それが発現する次元で、その活動実態が錯綜した関係にあるため、①行動原理（個人レベルでの行動規範に関わるもの）、②組織原理（組織レベルでの活動と運営の理念にかかわるもの）、③社会原理（活動を社会の仕組みとしての制度的な次元で位置づけるもの）の各レベルでの達成課題の整理が必要となる。

筆者は、実証的検証を通して、話し相手ボランティアの行動原理の解明を試みてきた。その結果、「互酬的關係性」や「対話」といったキーワード

を抽出することができ、昨今の研究によって、「孤立・孤独」、「非人間的空間」、「存在の危機的状況」をキーワードとするような生活を余儀なくされている対象者にとっての話し相手ボランティアの有用性を確認することができた。

現在、話し相手ボランティアは、その活動者の裾野を広げつつある。このボランティアの力を伸ばすためには、「よき聴き手」となるための系統的な教育と訓練の場を含めた、専門家や他の地域リソースによる総合的な活動支援およびネットワークの構築が求められているなかで、筆者は、「定例会は、話し相手ボランティア活動の支援の一環として有用である」とする先行研究結果に基づき、2005年3月を第1回として、現在まで継続的に月1回（毎回2時間程度）の割合で会に参画してきた。

しかし、具体的な「定例会モデル」の存在しない現状にあって、筆者を含むスタッフは、①参加者は、基本的に養成講座を修了した者とするが、活動に興味関心のある人には広く開かれた会とする、②「場」を設けて活動者の参加を待ち、その参加は任意とする、③定例会は、任意参加者の「自由な語り」に関われるとする3項目の基本スタンスを確認したうえで始めることとした。

本稿は、話し相手ボランティア活動の支援の一環としての「定例会」のあり方を具体的にすることを目的として、まず、筆者が当初より参与する埼玉県T市、地域包括支援センターの話し相手ボランティア事業の概要と現在までの活動状況をまとめた。

そして、2005年3月より月1回の割合で開催されている定例会の3月から7月までの5回分の逐語録を、参加者と進行役別にKJ法によって分析し、その内実を把握したうえで、ハンナ・アレントの「活動理論」に依拠しつつ、「定例会」のあり方を考察した。最終的には、活動支援としての「定例会」に求められる機能と役割を明らかにしたものである。

具体的には、「定例会」が活動支援として機能するためには、活動者の「活動への勇気」を後押しするように機能しなければならないこと、「定

例会」は参加者の全ての自由な語りに関われ、①活動者と対象者の未完の「対話」を一巡する場として機能すること、②活動者が、自身の(家族)物語を再構成する場として機能すること、③対話や関係作りの技術、方法など必要とする知識を得て学ぶ場として機能することが求められていることを提起した。

また、「定例会」の進行役は、参加者ひとりひとりが、それぞれの自由な語りに関心をもって聴く「聴衆」であるようにモデレーター(調整役)として機能し、参加者ひとりひとりが、自由に「現われ」を開示し、それが「新たな語り」に関われるようにプロモーター(促進者)として機能しなければならないことも提起した。

6. おわりに

2005年11月の定例会に参加した25名を対象に、アンケート(無記名、自由記述方式)を実施して定例会についての意見や要望を聴いた。本定例会は、あくまでも個人として話し相手ボランティアを行う活動者が任意に集う場である。初回開催より通算9回目を迎えたこの時期にアンケートを実施した背景には、活動支援となる定例会モデルを確立するにあたって、現形態が妥当であるかどうかを確認したいという思いがあったためである。その結果、ほとんどが今後の継続を含めて今の形態を是認する回答を寄せている。回答数は養成講座修了生の約30%であるため、活動者すべての思いを網羅できていないが、3割の活動者には受け入れられていることを確認することが出来た。

また、「定例会に参加して、十分に話せているか」との問いに対して、「出来ている(12名)、どちらともいえない(11名)、いいえ(2名)」との回答を得た。「いいえ」と回答した2名は定例会を体験交流の場と認識しており、「未活動であるため体験を話すことが出来ない」という理由を挙げている。「どちらともいえない」を選択した11名は、「恥ずかしい」「言わなければよかったと思うことがある」「発言者の言動に反発を覚えたとき、ストレートな表現で返してはまずいと思う」「全体のなかで自分の気持ちを言うこと

は本当に勇気がある」「他の人が代弁をしてくれている」「話しをするとき整理して話せない」などの思いを記述している。

このアンケート結果によって、月1回、任意に参加する形態は受け入れられているが、定例会参加者ひとりひとりが、それぞれの自由な語りに関心をもって聴く「聴衆」であって、個々が自由に「現われ」を開示し、それが「新たな語り」に関われるためには、グループ運営等においてのさらなる工夫が求められていることがわかった。

現在、定例会において参加者自らが課題として捉え、さらに学習の必要性を感じた内容に関しては、新たに月1回定期的に勉強会を開催し、演習形式の事例検討や言語障害や認知症等についての学習を深めている。

また、定例会は話し相手ボランティアとして個別に活動する人が、その時々に参加・不参加を自分の意思により選択して集う任意グループであるため、グループとしての拘束力はないものの、現状把握や情報収集は主体的に行わなければならない。そのため、不参加時の状況を知りたいとか情報を入手したいという要望にこたえる形で、定例会の模様をまとめた「風のお便り」を月1回発行している。

この間、定例会は継続的に開催して通算21回目を迎えた。そして、この会のなかで発信された考えや思いが、他のメンバーからの後押しや賛同を得ることによって具体的な活動として結実しつつあり、それに呼応して、スタッフは具体的な活動支援のあり方を考えてきた。2007年3月には、話し相手ボランティア活動とはどういう活動なのかを、一般市民や関係諸機関に広く知ってもらいたいというメンバーの思いが、具体的な「集い」として結実する運びである。

このような現状からも、定例会が活動への勇気の後押しとして機能し始めていると評価してもいいのではないかと考えている。今回、定例会のあり方に関する本調査により、その機能や役割が具体的にあり、定例会の有用性を再確認することができた。この結果を受けて、「定例会モデル」を構築するべく研究を継続する所存である。

引用・参考文献

- 1) 全国社会福祉協議会 (1996) : 全国ボランティア活動者実態調査報告書、II-10
- 2) 全国社会福祉協議会 (2002) : 全国ボランティア活動者実態調査報告書、P64
- 3) 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室は1998年より、看護・介護の経験者である社会人を受け入れ、多種多様な大学院生が臨床哲学の創出・展開にそれぞれの立場から参加している。そのテーマのひとつに「対話」がある。研究の成果をまとめた報告書として、科学技術政策提言「臨床コミュニケーションのモデル開発と実践」(平成15年3月、研究代表者 大阪大学大学院文学研究科・教授 鷺田清一)を上梓している。
- 4) 小澤元美 (2003) : シニア傾聴活動におけるボランティアのQOLにおよぼす影響、筑波大学大学院修士論文
- 5) 筆者 (2002) : 話し相手ボランティアと高齢者の相互作用に関する研究 -話し相手ボランティアの「聴くこと」の視点から-、日本社会事業大学博士前期課程論文
- 6) ハンナ・アレント、志水速雄訳 (1994) : 人間の条件、ちくま学芸文庫
- 7) 村田久行 (2000) : 傾聴ボランティアのトレーニングプログラムとスピリチュアルケアの実践、ターミナルケア、10(2)、三輪書店
- 8) 小澤元美 (2003) : シニア傾聴活動におけるボランティアのQOLにおよぼす影響、筑波大学大学院修士論文
- 9) 筆者 (2002) : 話し相手ボランティアと高齢者の相互作用に関する研究 -話し相手ボランティアの「聴くこと」の視点から-、日本社会事業大学博士前期課程論文
- 10) 筆者 (2006) : 話し相手ボランティアの活動支援としての「養成講座」に関する一考察 -ハンナ・アレントの「活動」理論を視座として-、山梨県立大学 人間福祉学部 紀要 第1号 P11-20
- 11) 2006年、事業主体である地域包括支援センターのスタッフ2名が、全国社会福祉士大会で「話し相手ボランティア養成における地域支援 -実践報告と今後の可能性-」と題して発表した内容を参照
- 12) 質問項目 「1. 定例会にはどのくらいの頻度で参加しているか。(自由回答)」「定例会では、十分話ができているか。(3択: はい どちらともいえない いいえ)」「3. 十分話ができている場合の理由 (自由記述)」「4. 定例会についての意見、要望 (自由記述)」
- 13) ハンナ・アレント、志水速雄訳 (1994) : 人間の条件、ちくま学芸文庫、P288
- 14) ハンナ・アレント、志水速雄訳 (1994) : 人間の条件、ちくま学芸文庫、P286-386

The Role and the Function of Regular Meetings as the Support for a Listening Volunteer's Activity

— As a Support for “The Courage of the Person Conducting the Activity” —

YOKOYAMA Kimiko

Abstract

This paper aims to discuss the details of regular meetings as a part of voluntary activities for support. The discussion will be conducted accordingly to the themes, the principles of the action of the volunteers, principles of organization, and social principles. The state of the regular meeting was considered based on the Hannah Arnett's activity ethics. This was conducted by analyzing the recordings of the facilitator and the participants at a regular meeting held once every month from March 2005 in T City, Saitama prefecture using the KJ method. The role and the function of regular meetings as the support for activities are clarified.

Specifically, in order for a regular meeting to function as a support for activity, it must help to increase the courage of the person conducting the activity, and the regular meeting must be held so that participants are able to freely express themselves. It was also revealed that the regular meetings must also function as (1) a place which summarizes and compliments the incomplete dialog between the person who conducts the activity and the participant, (2) a place where the person conducting the activity reconstructs his/her own (family) tale, and (3) a place where necessary knowledge such as techniques and methods on dialog and construction of relationships can be learned. Moreover, was suggested that the facilitator of a regular meeting must play the role of an adjustor or a promoter.

Key words : A Listening volunteer, A Support for activity, Regular Meetings, Adjustor, Promoter.